

レクリエーション運動と生涯学習活動

鹿児島県レクリエーション協会 副会長 神之門 透

はじめに

～レクリエーションコーディネーター資格と社会教育主事資格～

今年で68歳、少し早目の退職をしてからちょうど10年。これまでライフワークとして取り組んできたレクリエーションコーディネーターと社会教育主事というふたつの資格、それぞれの活動について振り返ってみる機会をいただいた。

思い返すとちょうど50年前、大阪万国博覧会の開かれた年に、アルバイト先であった（財）大阪府野外活動振興協会が受託する服部緑地ユースホステルでのヘルパー時代にレクリエーションと出会い、その後大阪府立勤労婦人ホームで勤労青少年指導員としてレクリエーションを活用した実務を経験したあと、24歳のときに地元吹上町(現日置市)に帰り地方公務員となった。

33年間の公務員時代、その半分の年月を教育委員会に籍を置き社会教育主事資格を取得し、主に住民の生涯学習によるまちづくり活動を手伝ってきた。その他の職場でも行政を進めるにあたってはレクリエーションの手法と生涯学習理論に基づく社会教育主事としての自覚が大いに役に立った。

しかし平成の大合併は行政の仕組みや住民の生活とりわけ生涯学習にも大きな変化をもたらした。“民主主義の学校”（寺中構想）であるべき公民館が教育委員会の手を離れ首長部局のコミュニティ協議会組織に再編された。

退職後にはもうひとつのライフワークであるレクリエーション運動の普及活動にのめりこんだ。鹿児島県レクリエーション協会の理事長を任せられ、それまで県教育庁保健体育課と県総合体育センターという行政組織の下に“負ぶに抱っこ”状態だった県レクリエーション協会の活動を何とか自主運営できるように取り組んだ。スタッフの協力のおかげで現在は文部科学省の事業である「教員免許状更新講習会」を受託できるまでになった。

レクリエーションと生涯学習、このふたつを同時に実践できる機会もいただけた。鹿児島純心女子大学が公益財団

法人日本レクリエーション協会課程認定校としてレクリエーションインストラクター資格取得のための養成講座を担当させてくださった。将来保育園や小学校の先生になる学生さんと生涯学習の意義やレクリエーションの手法について一緒に勉強できたことは大いにやりがいのあることであった。現在は志学館大学が「レクリエーションの基礎と指導法」という講座を開設してくださっている。社会教育主事を目指す学生には必要単位として認定もされる。

レクリエーション運動と生涯学習活動に、なぜ私は興味を覚えたのか、その魅力はどこにあったのか考えてみた。

1. レクリエーションコーディネーターとは

～ホスピタリティにみちあふれ、人を幸せな気分にする運動家～

初めにレクリエーション運動について述べる。

公益財団法人日本レクリエーション協会は、1978年「レクリエーションは人間の生きる喜びです」というスローガンを発表した。そのために、①レクリエーションで健康を高め、うるおいのある生活を築こう。②レクリエーションの輪を地域にひろげ、住みやすい町をつくろう。③より良いレクリエーション環境をつくるために立ち上がろう。という具体的な活動目標も示した。これはレクリエーションの根源的な意味を「生きる喜び」と定式化し、それを実践する具体的な方策として「心身の健康づくり」・「まちづくり」・「環境づくり」をあげたものである。¹人はみな「生き生き」と生きることを求めている。子どもは嬉々として遊びにたわむれながら成長する。成人の場合それはレクリエーションと呼ばれるものになる。レクリエーションは生き生きとした生命力を引き出す活動の総称であり、その生き生き活動が人に「生きがい」を与えてくれる。レクリエーション活動は自由な時間に自分の意思で行われる。したがって、レクリエーション運動の基本的な方向は、自由で主体的な人間存在の確立といえる。

¹ 藪田碩哉『日本社会とレクリエーション運動』実践女子学園学術・教育研究叢書19、実践女子学園、2009。

レクリエーションコーディネーターは、そういう活動を企画したり支援する役割である。レクリエーション活動の特徴は対象者としての個人やグループを生きがいにみちた日常生活に導くことである。

その目的を達成するために「レクリエーション財」の活用がある。レクリエーション財とは、ゲーム・ソング・ダンス・クラフト・軽スポーツ等の活動である。ロジェ・カイヨワの「遊びと人間」やヨハン・ホイジンガーの「ホモ・ルーデンス」が指摘するように「遊び」には様々な種類と性格・効力がある。

「ゲーム」を構成する4つの要素、アゴーン（競争）・アレア（運）・ミミクリー（演技）・イリンクス（目眩）は、パイディア（遊びの原初的能力）という単純な遊びの世界からルーデイスというルールを伴った現代社会における経済活動やスポーツ・芸術活動の原点になっている。そういうゲームを構成する要素を上手に活用し、目的達成のための手段として有効に活用すれば人は楽しみのなかで自発的で有用な行動をとるようになる。これこそが生き生きとした生命力を引き出す活動である。

人は老若男女を問わず「ゲーム」に打ち興じているときは我を忘れて夢中になる。そのとき知らず知らず性格がでる。グループ対抗のゲームをすれば一体感が増し、チームワークの醸成課程で人はそれぞれの役割を演じる。じゃんけんに勝ったら素直に喜び、負けたら悔しい。楽しいゲームを通じて自分を振り返ったり他人を観察することもできる。やりようによってはジョハリの心の窓、「盲目の窓」や「秘密の窓」を少しでもせばめ、「開放の窓」を大きく広げることがゲームを通して実現できる。レクリエーションコーディネーターとは、ホスピタリティを大事にし対象者の心の楽しみを実現できる人である。そのためにゲームやソング・ダンスをはじめレクリエーション財をうまく活用できる人である。

2. 社会教育主事とは

～私の考える生涯学習～

次に、社会教育について、特にその基礎となる生涯学習について、述べる。

東京上野の国立社会教育研究所で社会教育主事資格取得研修を2ヶ月に亘って受講した。初めて聴く社会教育の理論に夢中になった。なかでも1965年パリ・ユネスコで開催された成人教育推進国際委員会で提出されたというポー

ル・ラングランの「生涯教育の理論」にはすっかりはまってしまった。これまで曖昧模糊としていた社会教育行政マンとしての職務がおぼろげながら見えてきた。必要課題と要求課題の違いや発達課題の考え方について、まさに“目からうろこ”であった。

当時中央公民館での学習は趣味の講座が花盛りであり、本人たちも私もこれが生涯に亘って学習すること、即ち生涯学習だと思っていた。しかし、それとは別にそれぞれがそれぞれの発達段階において学習すべき「発達課題」というものがあることを知った。

カリキュラムのある学校教育と違って社会教育の世界では住民がそれぞれの発達段階に応じ学習すべき課題があるということである。これが「必要課題」である。

私が行政マンとしてやるべきことは行政の直面する課題や地域に散在する諸課題を、住民の必要課題に置き換えて考えてもらうことであった。

昔は読み・書き・そろばんができれば十分という時代があった。しかし、世の中の変化はそれを許さない。人は学校以外でも常に学習をしなければならぬ時代に生きている。冠婚葬祭への取り組み方、親戚との付き合い方、地域の習慣や風習、また子どもの育て方や日々のゴミ出しの方法、年金や介護の問題、マイナンバー、等々知らねばならないことが山積している。とりわけ、最近の情報化社会にあってはIT（情報技術）の目覚ましい進展にはついていくのが精一杯であるが人は様々な情報機器を前にして時代のニーズに合った学習をせざるを得ない。これが発達課題であり必要課題でもある。

生涯学習活動は強制されてやるものではなく、自由に使える時間を使って自分の意思でやるものであるから理解度も深い。行政は広報紙を通じてお知らせしているというが、住民の主体的な学習にかなうはずはない。

世の中の仕組み、例えば国民健康保険制度・介護保険制度・各種補助金制度等々を住民が理解しているのとしていないのでは、その遂行上雲泥の差が出てくる。私はそのことを経験を通して実感した。

3. 公民館活動こそ生きた生涯学習

～趣味の講座から社会教育学級へ～

最初中央公民館で接したのは様々な公民館講座の受講生である。学習者の多くは要求課題（自分のやりたい趣味等）の学習であった。そういう受講生や多くの住民に、要求課

題のほかにも大事な学習すべき必要課題がある、それは発達課題と呼ばれるものであり3歳児には3歳児の、青年には青年の、成人には成人の、お年寄りにはお年寄りのそれぞれの発達段階に応じた学習すべき課題があるとことをあらゆる場所でことある毎に説明した。

そこで各地区公民館ごとに住民の発達段階に応じた各種社会教育学級を組織してもらった。高齢者学級・婦人学級・青年教室・家庭教育学級・祖父母学級等々。特筆すべきは、それぞれの社会教育団体にその学級の運営を担ってもらったことである。高齢者学級は老人クラブに、婦人学級は婦人会に、青年教室は青年団に、そして家庭教育学級はPTAに、という具合である。このことは社会教育団体の育成にも繋がったし、各地区公民館同士のいい意味での競争にも役立った。

公民館講座の中にも農業講座・男性料理教室・スポーツ教室等々実用的な講座を開設した。講師は身近な農業改良普及員、食生活推進員、体育指導委員（現在はスポーツ推進委員）や学校長、退職校長会、役場職員等々に担当してもらった。

問題は学習内容であったが、そこは教員を退職された社会教育指導員の先生方が趣旨をよく理解して、それぞれの発達課題をうまく年間学習計画に組み込んでもらった。地域の歴史や誇り、改善すべき地域の課題等も組み込んだので、それぞれの年代に応じた学級で同年代の人々の地域への関心も高くなった。行政からのお知らせや広報を持ち寄り集団学習することで共通理解が深まったり、逆に理解できないことは行政担当者と呼んでの学習にも広がった。行政としても住民が法律や制度を理解してくれることのメリットは大きい。これらは小学校区を対象とした9つの地区公民館での学習活動として進められた。因みにこの地区公民館は全て条例公民館である。

4. 行政課題と地域課題

～成果のあった事例、国保財政の建て直しと地域づくり整備事業～

宮仕えの定めで、その後首長部局の企画課と福祉課に異動になった。

福祉課では特別会計の国民健康保険財政が破綻して税金を大幅に上げなければならない状況になり、住民の理解と協力なしにはどうしようもなくなった。そこで各地区公民館の全ての社会教育学級でそのことについての学習を

重ねてもらった。住民は学習により国民健康保険制度を深く理解した。医療費の高騰は住民が病院に行くからだ、病気の大半は生活習慣病だ、また定期検診で早期発見に努めることが大切だ、自分たちの地域はどこよりも医療費が高いのに検診率は低い。住民自身の行動を変えないといけない、と気づいた。学習によって世の中の仕組みを理解し、話し合いによってお互いに努力した住民の行動は大きな力を生んだ。国民健康保険財政はとりあえずの危機を脱し、その改善率の高さから国の特別交付金までもらえた。

企画課では地域づくり整備事業という地域ごとの振興計画作りに携わった。ここでも地区公民館の学習によって住民の理解と協力が進んだ。地域の課題を洗い出しその解決のために国がやってくれること、県に頼まなければならないこと、町ができること、自分たちでやるべきこと、ひとつの課題を解決するために世の中の仕組みを学習すれば必然的にそれぞれがやるべきことが見えてくる。一つの例を示すと、ある農道整備という地域課題解決のために、住民自身が何のために必要か？自己負担金を出す気はあるか？みんなが賛成か？町の予算は大丈夫か？国や県の有利な補助制度は無いのか？といったことを考え学習する。そうして得られた計画は実現性が高い。農業のみでなく商業、漁業、観光、通学路、遊園地、住宅、医療、全ての分野で話し合いと学習活動が徹底されればより実現性の高い振興計画が出来上がる。私はこれこそが生涯学習によるまちづくりであったと確信している。

因みに時の首長さんがその成果に満足し、「行政はまさに社会教育である、行政の主役は主体性を持った住民である」と口にされた。

5. 余談、耳に馴染まない言葉

～ワークショップ、アクティブラーニング、ファシリテーション～

私の現役の頃は耳にすることのなかったのが上記の言葉である。雑にウキペディアで調べてみた。意味は解ったが私の理解では全てが生涯学習そのものではないかと思う。

ウキペディアいわく、ワークショップとは一方通行的な知や技術の伝達でなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学びあったり創り出したりする双方向的な学びと創造のスタイル。

アクティブラーニングとは、能動的な学習のことで授業者が一方向的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく

課題研究やPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語。

ファシリテーション（英：Facilitation）は会議やミーティングの場で発言や参加を促したり話の流れを整理したり参加者の認識の一致を確認したりする行為で介入し合意形成や相互理解をサポートすることにより組織や参加者の活性化、協働を促進させる。

公民館における成人の学習は座学ばかりでなく、実践を伴い現地を歩かなければ解らないことが多い。アクティブラーニングについても教室のなかでじっとしている人はいない、地域共同体のなかではみんなが先生でありみんなが生徒である。ファシリテーションに至っては、地域のリーダーそのものである。そしてこれらは全てレクリエーション活動そのものにも通じる。

6. 閑話休題、レクリエーション運動で何ができるか

～楽しくなければレクリエーション運動ではない～

レクリエーション運動で何ができるかを考える前に、これまで日本社会においてレクリエーションの果たしてきた役割を考察すればその答えが出てくるのではないだろうか。以下戦後から現代までの社会の移り変わりとしてレクリエーション運動の関わりについて、前述した藺田碩哉氏の説を参考にしながら述べる。

戦後のレクリエーション運動はアメリカの占領政策の一環として始まった。フォークダンスが流行し民主主義による男女同権や戦後の開放気分を味わった。また学校教育、特に体育の授業においては戦前の画一的な秩序・行進スタイルから、レクリエーションとしてのスポーツが奨励された。昭和24年制定の社会教育法では社会教育の範囲に「運動およびレクリエーションを含む」と明記された。

高度成長期には「職場レクリエーション運動」が全国的に広がった。オートメーション化の波の中で働く若年労働者の労務管理の必要から発生し、中には職場レクリエーションのリーダーとして個性を伸ばし社会的に脚光を浴びる若者も続出した。これはレクリエーションの持つ楽しさ、有益性、やりがい、協調性の発揮、グループワーク等の魅力の発露であった。

やがて世の中が豊かになるといわれるレジャーが登場し

人々は競ってレジャーに走った。しかし、ただ消費するだけのレジャーへの反省から健全な余暇の過ごし方がレクリエーションの新しい役割となった。この頃からレクリエーションの中身が重要視されるようになりレクリエーションに遊びの効用だけでなく教育的効果の要素が加わった。学校レクリエーションが盛んになったのもこの頃である。

オイルショックの後職場レクリエーションは衰退していくが代わって「地域レクリエーション運動」が盛んになる。都市の過密化と農村の過疎化が顕著になり、まちづくりという形で新しいレクリエーション運動を展開し、地域の祭りやスポーツ大会、子ども会活動、青年団活動等、地域の特色ある活動にレクリエーションリーダーは奔走した。

現在は福祉レクリエーションが全盛である。少子高齢化社会にあって介護予防はもちろん老後の楽しみとしてレクリエーションに参加する人達が増えた。特に施設に働く職員にとってはレクリエーションを駆使する技術は必須の条件となっている。高齢化とともに少子化の分野にもレクリエーションの需要は高い。

このように社会の変化に伴いレクリエーション運動も変化してきたがあくまでその基本は「楽しみ」である。いつの時代にあっても楽しいからこそ人々はレクリエーションに取り組み、その結果やりがい・いきがいを覚え生き生きした生活を取り戻すのである。

こういうレクリエーション運動史の中で全国津々浦々に広がる都道府県レクリエーション協会や地域レクリエーション協会の組織と、そこに加盟するレクリエーションの種目団体、レクリエーションインストラクター、レクリエーションコーディネーターの果たした役割は大きかった。

7. レクリエーション協会の活動紹介

～鹿児島県レクリエーション協会～

私の所属する鹿児島県レクリエーション協会は1974年に設立され、5つの職場加盟団体と22の地域レクリエーション協会、32の種目団体で構成されている。有資格者はレクリエーションコーディネーター49名、福祉レクリエーションワーカー187名、余暇開発士10名、レクリエーションインストラクター1,175名が所属している。

公益財団法人日本レクリエーション協会に加盟し文部科学省をはじめ各種の受託事業や補助事業を行なっている。また、鹿児島県教育庁保健体育課所管でともに県民のスポーツ・レクリエーションの普及に努め、コミュニティス

スポーツを振興し県民の体力向上、健康増進、地域の融和に資する活動を展開している。

主な事業は以下の通りである。

- ・**県民レクリエーション祭の開催**・今年で32回目を迎えた県の委託事業であり毎年県内を巡回して開催しレクリエーション種目の紹介や体験会を提供している。今年は種子島での開催で雨天にもかかわらず3500名の参加を得た。
- ・**レクリエーション学苑の開設**・レクリエーション運動に関心を持つ人々にレクリエーション理論（16時間）や実技（35時間）を年間10回のカリキュラムコースで提供している。修了者は公益財団法人日本レクリエーション協会のレクリエーションインストラクターの資格を取得できる。今年は福祉施設の職員や幼稚園の先生を中心に約50名の受講生があった。
- ・**高齢者の元気づくり支援者養成講座**・いわゆる福祉レクリエーションの分野で施設職員や介護に携わる人のために年2回開催している。毎回100名近い参加がある。
- ・**教員免許状更新講習**・文部科学省の委託事業で、10年ごとに更新が義務付けられている教員の免許更新カリキュラムの一環である。「コミュニケーション力を高めるレクリエーション活用の体験学習」（12時間）と「子どもたちが楽しく体力向上を図るレクリエーションの体験」（6時間）を提供して50名近い参加があった。
- ・**障害のある人とない人の交流事業**・市内の障害者施設との協働で、レクリエーションを媒介として地域住民を巻き込んだ交流を長年続けている。
- ・**その他の事業**・主に協力する事業で、鹿児島市すこやか長寿祭りウォークラリー、南日本新聞社主催健康ウォーク、県社会福祉協議会主催「ねんりん大学」、県自治研修センター主催「県・市町村新規採用職員研修会」等に運営協力や講師派遣を行なっている。

最後に

～再度、レクリエーション運動と生涯学習活動～

ここまで論を進めてきて、レクリエーション運動と生涯学習活動の共通点は「自分の自由になる時間」と「自分の自由意志」であることに気づく。どちらも強制されることがなく主体的に活動することが基本になっている。活動する

自由もあるが活動しない自由もある。どちらもやり遂げた後には素晴らしい達成感が残る。ライフワークとしてのレクリエーションコーディネーターと社会教育主事の役割を自覚した仕事は、案外こういう点で私の性格に合っていたのかもしれない。

レクリエーションの基本は遊び心である。最初は型にはまらない自由気ままな発想で行動し、やがてその行動が価値を生み新しいルールが確立して有益な活動へと導く。

生涯学習の基本もある意味有益を伴った遊び心である。楽しく有益であれば続けるし、楽しくなく有益でもなければいつでもやめられる。

だから自由で、有益で、楽しくなければ、レクリエーション運動と生涯学習活動とは言えない。